厚生労働科学研究補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）
分担研究報告書

7.「有効性と安全性を維持した在宅呼吸管理の対面診療間隔決定と機器使用のアドヒランスの向上を目指した遠隔モニタリングモデル構築を目指す検討」班

研究分担者　大平 徹郎　国立病院機構西新潟中央病院　副院長

研究要旨

CPAP に熟達した患者であれば、指導管理のための外来通院間隔が延長しても、在宅治療アドヒアランスは低下しない可能性が高い。

A. 研究目的

CPAP を在宅使用している外来定期受診患者の通院間隔と、治療アドヒアランスの関係を検討した。

B. 研究方法

対象は当院で CPAP 指導管理をしている外来通院患者(N=340)。①毎月受診、②隔月受診、③3 か月ごとに受診している患者の 3 群において、受診前 1 ～3 か月間の CPAP 使用率と 1 晩あたりの平均使用時間を比較した（後ろ向き検討)。なお 3 か月ごとの受診者は、2016 年 4 月の制度改定後に通院間隔が延長した患者である。

C. 研究結果

毎月受診群（N= 127)、隔月受診群(N=198)、3 か月ごとに受診する群(N=15)における平均 CPAP 使用率（CPAP 使用日数の比率)は各々81.8%、82.5%、96.7%で、1 晩あたりの平均使用時間は、各々316 分、341 分、370 分であった。

D. 考察

当院通院患者のおよそ 40% にあたる 340 名を対象とし、後ろ向きにアドヒアランスを解析した。その結果、受診間隔が延長しても使用率が高く、使用時間が多かった。背景として、CPAP に順応度の高い患者が、受診間隔の幅広い群に多く含まれることが主要因と推察された。

E. 結論

CPAP の使用に熟達した患者であれば、通院間隔が延長しても、在宅治療のアドヒアランスは低下しない可能性が高い。

F. 健康危険情報

無し。

G. 研究発表

1. 論文発表　　無し。
2. 学会発表　　無し。

H. 知的財産権の出願・登録状況

特になし。